



二つの都市で開かれた二つの展示会

韓 東洙（漢陽大学校建築学部東アジア建築歴史研究室 教授）

2012年10月、韓国の建築史に関する世間の耳目を集めた展示会が韓国のソウルと水原でそれぞれ開催された。これら二つの展示会は漢陽大学校建築学部の東アジア建築歴史研究室が主催したもので、建築史関連の展示会が少ない韓国の現実のなかで、学系は勿論、社会的にも多大な反響を呼び起こしたと言われる。

ソウルの展示会は漢陽大学校の博物館で開催された。展示の主題は‘韓国建築文化財の復元と創造の境界・警戒’である。会場は博物館の1階から4階にかけて構成され、2階には建築文化財を描いた金榮澤画伯の作品が展示されており、3階には、1970年代に復元された佛國寺の関連資料を中心に文化財としての建築物の復元過程をたどり、韓国における建築文化財の復元の意味を考える機会を提供している。この3階の会場には、佛國寺が復元したときに作成された、図面と文書、そして、東アジア建築歴史研究室が制作した1/10縮尺の模型を展示し、復元工場の現場と参加者たちの写真や、新たに竣工された佛國寺を訪れた国内外の貴賓たちの写真など、様々な視覚資料が展示されている。これらの展示物は、40年前の佛國寺の復元過程が生き生きと見える貴重な資料として韓国で初めて公開され、韓国の文化財の専門家たちにさらに注目されることとなった。また、4階には建築文化財の復元・修理・補修の作業を紹介するパネル資料とともに、工事に使われた道具を展示し、また、切手・葉書・貨幣・ミニチュア・小説・ポスターなどの建築文化財の関連商品と、修学旅行の写真やアルバムを展示した。そのほか、当博物館は、今回の展示企画に当たって、小学生を対象とした美術展を行い、建築文化財を描いたこどもたちの入選作品を会場の1階に展示した。それとともに、美術作家の作品も並べて展示され、建築文化財を描写した専門家の目線とこどもの目線を比較できる観覧も行った。

ソウルの展示会は、2012年10月15日から2013年2月23日までの約4ヶ月間開かれ、その間に‘関野貞とアジア調査’を主題とした、東京大学の藤井恵介教授の特別講演が行われ、また、こどもの建築体験教室、古



写真1 漢陽大学校博物館の3階に展示された佛國寺無説殿の模型と関連資料



写真2 漢陽大学校博物館の4階に展示された崇禮門の部材と文化財復元の関連資料

建築市民講座、佛國寺の現場踏査など、様々な行事も行われた。なお、この展示会の企画に当たって、韓国文化財庁の専門委員を歴任した、漢陽大学校建築学科出身の劉門龍氏が、彼自身が持っていた佛國寺の資料を東アジア建築歴史研究室に寄贈したことということもあり、文化財復元の関連資料を大切にすることの必要性を改めて考えることが出来たのである。

次に、水原の展示会は、世界文化遺産の一つである水原華城の城郭内に位置する水原華城博物館で開催された。この展示会は、‘日・韓・中の伝統木造建築と大木

匠の世界’という主題で、各国の関連資料をまとめ、東アジアの伝統木造建築における大工の建築世界を再び照らすものであった。特別企画展として行われた水原の展示会には、韓国の大木匠（宮殿や寺院、家屋を建てる職人）として無形文化財に指定された申鷹秀氏が参加され、紫禁城の大工である李永革氏、法隆寺の大工である小川三夫氏の両氏も中国と日本の大木匠としてそれぞれ招待された。5,000年に達した東アジア建築の歴史に日・韓・中の大工たちが一堂に会する最初の企画となり、非常に意味深い行事であったとも言われている。

水原の展示会は、これらの3人の大工が建築技術を学んできた過程と道具の使い方を理解できる作品や著作物などを並べて展示しており、それとともに、景福宮の勤政殿の栱包（コンポ）、紫禁城の太和殿の栱包と亭子（チョンジャ）、法隆寺の金堂の模型らが展示された。会場の入口には、日本と韓国の大工たちが道具を使って木材を調える作業を紹介するビデオの上映室を設け、観覧者の理解を増進させた。また、光化門を復元した時に作られた柱の部材を実物大の模型で展示して、大工の技量を鑑賞できるようにした。また、韓国と中国の建築技術に関する古文書をはじめ、清代の中国における有名な大工の家門であった様式雷の関連資料を紹介しており、会場の最も奥側には、別途の展示スペースとして‘大工の部屋’を設け、各国の大工の様々な道具を陣列し、道具の実際の使い方を撮った映像とともに鑑賞できるようにした。

一方、展示会の開催とともに企画したもう一つの行事は特別講演会であった。この講演会の内容は、3人の大工らが独自の作業方法と建築技法をそれぞれ紹介することであったが、会場をぎっしり埋めた古建築の専門家たちは勿論、建築学科の学生たちにも非常に有益な時間になったと言われている。

今回の水原の展示会は、韓国の言論社から大きく注目されたこともあり、水原華城博物館の優秀企画展示会の一つとして選定された。さらに、社会各界の市民団体からの要請により、2013年2月11日に終了予定であった展示期間を4月末までに延ばすこととなった。なお、水原の展示会は、2014年には日本の神戸にある竹中大道具館で、今回の展示内容をそのまま移して再び展示を行う予定になっている。

今までは、日・韓・中における古建築分野の交流は、学術的な側面にかたよって学者を中心に行われて来たが、今回の展示会を開催することで、実務をもとにした専門家たちが交流する機会を得ることが出来た。それは、



写真3 水原華城博物館の特別展に展示された光化門の柱と救仁寺の栱包の実物大の模型



写真4 水原華城博物館の特別展に展示された中国の大工李永革氏の関連資料と紫禁城の亭子の模型

東アジアにおける木造建築技術の発展を促すことができる、非常に意味のあることであったと考えられる。また、私は、今回の展示企画を経験しながら、建築歴史学者としての役割は学術的な研究に局限されることではないことを改めて悟ることが出来た。

なお、これらの展示会の紹介とともに、現在、水原華城の門楼を主題とした展示会が同博物館で行われていることも簡単に紹介したい。特別企画展として企画した今展示会は、水原華城の八達門の解体・補修の過程と、その過程から明らかになった伝統建築の形式と特徴を理解できる資料を展示したものであり、八達門の構築過程を具現した3Dグラフィックスの映像が非常に目立っていると言われている。また、翌年の展示開始をめざしている‘日・韓・中の建築歴史通史書の比較’という主題の展示会の企画について、日本の学界の方々から貴重な助言を頂きたいと思う。(翻訳：金 容範)